産婦人科だから実現にこだわった病児保育、障害児保育―足立病院・畑山博理事長に聞く◆Vol.2

2019 年 8 月 6 日 (火) 配信 m3.com 地域版

足立病院の院長に就任したときから目標の 1 つにしてきた「障害児保育への取り組み」。産婦人科の医師として子育てをサポートし、医療的ケア児とその親とも向き合う足立病院の理事長・畑山博氏に、病院が保育に取り組む理由と医療コミュニティを核とした「まちづくり」構想について聞いた。（2019 年 6 月 7 日インタビュー、計 2 回連載の 2 回目）

――足立病院は、保育にも取り組んでいますが、それはどんな思いからですか？

院長に就任したときに立てた目標の最後の 1 つが「保育所をつくること、特に障害児保育に取り組むこと」でした。「京都で分娩数が最も多い病院になる」「小児科を開設する」「不妊治療センターをつくる」、この 3 つの目標は 2003 年までに実現することができました。そして最後のミッションとして残ったのが保育です。

「病院がなぜ保育所を」と不思議に思われるかもしれません。ベビーブーム時代の産婦人科は、出産というワンシーンで女性と関わることで、その役割を果たしてきました。ただ、ライフスタイルの変化によって、日本は急激に少子化になっています。その根底には、「子どもを産んで育てるのは、とても大変なのでは」という夫婦の不安があります。この状況で産婦人科の病院に何ができるかを考えました。その答えが、世の中の夫婦に、「子どもを産んで良かった」と思ってもらうことでした。

保育園に通って来る子どもたちのほとんどを自分の手で取り上げたと語る畑山博理事長

まず手始めに、「子育ては楽しい」と思ってもらうために、子育て支援センターをつくりました。子育て中の親子の交流の場として京都市から指定を受けて「つどいの広場」の運営もしています。子育ての不安や心配の相談にのり、いろいろな教室も開催して、みんなでわいわい楽しい子育てを目指しています。

その次に実行したのが、病児保育です。子育て支援センターに寄せられる相談に、「子どもが病気になると仕事をすることができない。そんなときでも預かってもらえる施設があれば」というのがたくさんありました。じゃあ、病院に併設してつくろうと思って、京都市と協議に入りました。当初は前例が無いということで難色を示していた京都市を、「足立病院には小児科があるので子どもに何かあったときにはすぐに対応できます」と説得して、2011 年に京都市が初めて開設した病児保育施設「こだち」をつくりました。

スタートは 1 日に 3 ベッド、3 カ月もすると足りない状況になって 6 に、それでも足りなくなって 9 に、現在は 12 ベッドになっていますが、それでも預かりを断る日があります。小児科医、看護師、保育士が連携して子どもを見守っているので、親御さんも安心して預けることができるようです。

病院に併設してある病児保育施設「こだち」。12 あるベッドがすべて使われる日も多い

――2015 年に小規模保育事業所「あだちほいくえん」を開園して本格的に保育への取り組みを始めましたが、そのきっかけや経緯を教えてください。

最終的な目標として「障害児保育に取り組む」というのは、頭の中にずっとありました。産婦人科の医師は、全力で出産と向き合いますが、それでも障害を持って生まれてくる子どもがいます。生活をする中で医療的なケアを必要とする子どもは、全国で約 1 万 8000 人を超えていて、京都に 150 人くらいいます。出産後に、その子とその親御さんと向き合うことも産婦人科の医師の仕事だと思っています。そのためには、医療的ケア児を見守る保育所をつくる必要があると考えていました。ただ、医療と違い、保育の世界は未知数だったので、一歩ずつ進めていきました。

最初に子育て支援センターをつくって、次に病児保育所を併設して、それから保育園の運営を学ぶために、0 歳児と 1、2 歳児を対象とした小規模保育事業所「あだちほいくえん」を開園しました。実際に子どもたちと接することで起こりうる問題を把握して、できることを実感して、同時に医療的ケア児を預かる準備として医師と看護師と保育士が一緒になって研修をしました。

できるだけ木材を使って建てることにこだわった「御所の杜ほいくえん」

そして 2018 年に、京都市認可の大規模保育園「御所の杜ほいくえん」を開園して、4 人の医療的ケア児に入園してもらいました。想像していなかった嬉しい出来事がありました。月曜から金曜まで医療的ケア児を預かることで、子どものケアで大変だった親御さんたちの心にゆとりができて、将来への希望も芽生えて、「この子のために兄弟をつくってあげたい」といって 2 組が妊娠して出産をしました。

保育園に通ってくる子どもたちも医療的ケア児と仲良く一緒に過ごしています。ときには、ケアのお手伝いを率先してやってくれます。これも嬉しかったことです。今年、新たに 3 人の医療的ケア児が入園して、現在 7 人になりました。将来的には倍以上にしたいと考えています。

子どもたちの心と身体の健康な発達のためにつくった緑豊かな園庭

――2018 年に院長を退任されて、新たに理事長に就任されましたが、これからのビジョンについて聞かせてください。

医療機関を核とした「まちづくり」ができればと考えています。急速に高齢化と少子化が進む現代社会においては、人々の暮らしと医療は、もはや切り離すことができない関係になっていると思います。それならば、より密接に関わり合いながら、暮らしやすいまちをつくっていく。医療機関が一カ所に集中してコミュニティをつくって、高齢者が在宅で自分らしい生活を送れるようにケアし、病児保育施設や保育園、小学生が通う学童クラブを運営して子育てをサポート、一生涯にわたって女性とその家族の健康を見守り、安全で安心な暮らしができる「まち」を実現する。「このまちで、子どもを産みたい、育てたい、生きていきたい」、そういってもらえる「まち」が理想です。

眼科、皮膚科、内科、耳鼻咽喉科、泌尿器科の開業医院が入る京都メディカルガーデン

◆畑山 博（はたやま・ひろし）氏

1995 年京都大学医学部大学院修了（医学博士）。京都大学医学部附属病院産婦人科などを経て、1996 年に医療法人財団今井会足立病院の院長に就任。2018 年に院長を退任し、新たに足立病院理事長、社会福祉法人あだち福祉会御所の杜ほいくえん理事長に就任。

【取材・文・撮影＝竹花繁徳】